

2011年5月20日、

小林こうじ昭島市議にイ

ンタビューを行いました。



Q. 05年の都議選、07年の市議選そして今回は震災直後と民主党に対して大逆風が吹いているという難しい状況で3回目の選挙を終えられましたが、小林さんにとって選挙とはどういうものですか？また、今回の選挙を振り返っていかがでしたか？

私は今まで3回の選挙を経験してきました。都議選を1回と市議の1期目と2期目のそれぞれ2回です。どれも違った選挙だったと思います。特に1回目の都議選は質が違いました。まず、規模が大きいことです。それとこの選挙区は1人しか選出されません。ですので、市議会議員同士で仲間となって戦います。市議選の場合は、当選後は仲間でも選挙中は敵になるのでそこが大きく違ったところだと思います。市議選の2回に関しては、1回目の時、私は民主党として1人でしたので戦い方が違いました。2回目となる今回は2人とも長島の元秘書ということで党に対する逆風と震災直後ということで難しい選挙になりました。震災後に議員が集まった時もお互い選挙のやり方はどうしようなんて話も出ていました。

選挙カーをはたして回して良いのかも私も思いました。とは言え、あまり自粛ばかりでもないけないと考えていましたのでいつも通りにはやるけど少し抑え目という形で今回はやらせて頂きました。そう言う意味では今回はなかなか経験できないような選挙でした。

選挙を総論的に見れば、やはり選挙はあった方がいいと思います。選挙によって選ばれた議員が市民からの負託を受けて議会で発言をしているわけですから。昭島での選挙については定数22に対して24人しか出ていない状況です。これは近隣の立川、日野と見ても2人しか落ちない選挙はありません。結果として、議員定数の削減を行っていなければ選挙にもなっていない可能性があります。ですので、これからは昭島をもっと魅力のある街にしていかなければいけないと思います。

Q. 今回の選挙ではご自身が一児のお父様ということもあり「イクメン」をキャッチフレーズにされていましたが、今後の4年間でどのような政策の実現を目指していらっしゃるのでしょうか？

私はイクメンということのみならず、子ども政策に取り組んできました。都議選の時から言ってきたこととして、イクメンというのは今流行りの言葉なので使わせていただいただけでして、これからも子ども政策について取り組んでいこうと考えています。

小児救急については都議選の時から訴えてきたことです。ただ、これは昭島市だけではなく東京都の力もないと出来ないことです。もう一つは、待機児童についてです。保育園と学童クラブというのがあります。昭島の学童クラブも一時期多摩地域で一番待機児童が多かった時期もありまして、それを解消しなければいけないと考えています。震災後ということで経済状況が思わしくなく、この先が不安視されています。これでは共働きでないと難しくなると思います。そういう時に子

どもが預けられないので働けませんと、なったら生活もままならなくなってしまう。ですので、待機児童の数が多いか少ないか別としまして、例えば1人でも市民の方が働きたくとも働けない状況にあるのなら、それを解消しなければいけないと思います。これは子育て支援だけではなく生活支援にもなるのです。

それと学校の校庭の芝生化にも取り組んできました。校庭の芝生化によって校庭を走り回る子どものケガが減少することも見込めますし、情操教育にも良いとされています。都市の緑化にもつながります。もう1つはすでに実施していますが、こんにちは赤ちゃん事業です。これは生後4カ月の赤ちゃんがいるご家庭を全戸訪問するという事業です。効果は2つあります。1つは育児相談です。もう一つは母親の様子を見るといことです。お母さんというのは出産するとホルモンバランスが崩れて10%から15%の人は産後うつ病になってしまうそうです。産後うつ病はうつ病と同じでは自殺してしまう方もいらっしゃいます。ですので、戸別訪問することによってこうしたことの発見にもつながります。これは以前、日野市に行った時にこうした事業の存在を知って、その後昭島市でも実施することになりました。

Q. 現在、全国的に災害対策を見直す動きがありますが、立川断層が近いこの昭島市の防災対策についてどうお考えでしょうか？

まずは、どれだけの危機感を持てるかが重要になってくると思います。危機感を持つことによって個人の行動にもつながってきます。地震対策としては、建築基準法改正以前の建物も耐震診断を行うべきです。これは市だけではできませんので、都や国とも連携を取りながらやるべきです。他にも昭島市内の小中学校の補強工事は来年中に完成される予定です。立川断層も3500年周期だと言われていますが、今回の地震で何らかの影響が

あったかもしれません。そう意味では、危機感を持つことがやはり重要だと思います。他に市では食糧の備蓄は行っておりません。そして、これは私が阪神・淡路大震災の時に感じたことで市議の1年目から言ってきた災害用の簡易トイレの数を増やすことです。ここ数年で多少増やされましたが、まだまだ不足していると思います。

Q. 失礼かもしれませんが、市議会はあまりメディアでの露出もなく、市民の目に触れる機会が少ないことから身近に感じる方が多くないように感じます。以前にも「開かれた議会を目指す」と仰っていましたが、今後どのように市議会をPRしていくつもりでしょうか？

開かれた議会にしていくのはやはり議員の仕事です。今回は議員の数が多すぎるという内容の陳情が出たので削減されたわけでして、逆に議員の数が足りないと思っていただけのようなことをやらなければいけないと考えています。議員が22人では足りない、もっと自分の身近に議員を作りたいと思っていただけけるようにしていきたいですね。全国的に削減される傾向がありますが、その削減理由として財政問題が挙げられます。財政を逼迫させるから議員を減らすべきだという声が多いです。しかしながら、多くの市の議会予算は全体の予算の0.1%ほどしかないので、ですから、そこを削減してもあまり財政健全化にはつながりません。なので、私は削減には賛成ではありませんが、市民からそういった要望が来たとういことで受け入れました。議会の仕事はそこまで必要ではないと思わせたのは議員の責任ですから。今後、定数を増やしましょうという陳情が出るように頑張りたいと思います。ですが、今回の削減で浮いたお金は議会のインターネット中継やライブラリー検索など新たな事業に使えればと思います。そうした事業で議会からもっと情報を発信していこうと考えています。

議会の在り方というのはどこの自治体でも

課題になっていると思います。先進市では次々と改革が行われています。例えば、多摩市議会では議長を選挙で選びました。立候補者がそれぞれ所信表明をし、それから投票を行いました。これは議会改革基本条例を作ったこうなったわけです。そして、市民からその過程が公開されてないと指摘され、現在は公開されています。昭島では会派の代表者が集まっていわゆる密室で決めてしまいます。本来は選挙をすべきだと思いますね。

市議会内の委員会の委員長を決める作業も大事です。委員長は委員会の開催権と持ち、運営方法にも大きな影響を与えます。ですので、委員長を誰にするかによってその委員会は大大きく変わってきます。市議会の様子を市民に伝える市議会だよりの在り方は議会運営委員会によって決められており、その委員長に誰がなるかによって開かれた議会になるかが左右されてきます。議会のPR方法としては個々の議員の努力が必要ですが、市民の方に危機感を持っていただくことも大事です。そうした意識が向上するような機会があれば良いのですが、なかなか無いというのが実情です。現在は議会を知っていただく方法が市議会だよりと議事録と個別議員の議員通信ぐらいししかありません。これからは、もっと多くの発信方法を考えなければいけません。議会内にもそういう動きもありますが、もう少し時間が必要です。

